

# 北の譜

聞き手 奥津義弘記者(北海道新聞社)

## ③<音楽開眼>

### 知識のなさを痛感

まあ、そんなわけで音更には三年いて、大正十五年(一九二六年)、二人の兄が入った札幌二中(現札幌西高)に進みました。試験は帯広中学で受けたんですが、僕のほかにもう一人おりました。映画館の息子さんで、その方は落ちましたが。

札幌に出てまず驚いたのが、今でいうと偏差値ですか、その差ですね。それから友達と本を見てるとヨットが出てきた。僕が「帆前船」といったら、「ばかア、これはヨットだよ」といわれて、「ああ、そうか、そういうものがあるのか」と知識のなさを痛感して。

どうもこの一般的な知識というものでは、ひじょうに遅れていたんじゃないでしょうか。それでいて魚の釣り方とか、カケスのとり方といったよけいなことは知ってるわけです。文化的なこととは何も知らない。カルチャー・ショックは大きかったですね。ですから今でも、ヨットには反感持ってるんですよ。

二中では「めばえ会」という絵画グループに入っていました。会には一級上の佐藤忠良さん(彫刻家)や同級の船山馨さん(故人、作家)がいて、私ら三人は主力といっちゃあ、おかしいんですが、まあ自らはそう称していたんです。三人とも絵かきになろうと思ってまして、われわれだけ狸小路あたりで展覧会をやり、絵が売れたものですからちょっと飲んだ、と忠良さんだったかが、どこかに書いてました。僕は記憶にないんですが。

忠良さんは、僕に絵をかかせたら鉛筆の削り方が違うのでそれから教えてやった、ともよく聞いてます。船山君は剣道が上手でした。メンを取ると、こう桃太郎侍みたいに大見えをきって。

### バイオリンに熱中

絵をやりながら音楽の方にも関心があって、二年の時から学校の演奏会に出ました。えらそうに、バイオリンでバッハとかを弾いてたんです。

音更にいるころ、まあそこは田舎なんですけど、どこの床屋さんにもマンドリンやギターがぶら下げてあったりしたもんです。それをいたずらで弾いたり、親に楽器を買ってもらったりしていたので、中学に入る前から弾くだけはできたんです。

中学に入ってから、小樽高商を出た人にちょっと習った以外、一人で教則本なんかを見ながら指にタコが出来るぐらい練習しました。その後、一度、田上義也さん(建築家)に教わったことがあります。当時の一流のバイオリニストでしてね。「あんたにはもう教えるところがねえや」なんていってくれました。

そのころ札幌には、ジンバリストとかハイフェッツとか、世界の第一級のバイオリニストが来てました。今でもよく覚えてますが、「ああ、こういうのが世界の大家っていうのか」ってねえ。

ハイフェッツは松竹座、ジンバリストは公会堂でやりました。北大の先生が連れ帰ったドイツ人の奥さんのピアノやバイオリンの小さな演奏会もよく聴きにきました。



▲少年期の昭(左)と次兄 勲(右)

### 作曲の勉強始める

二年のころ、友人の三浦淳史君に「音楽やるには作曲やらないと意味ない」とそそのかされて作曲の勉強も始め、簡単なピアノ曲などをぽつぽつ作ってました。こんなことから僕は三浦君のことを「メフィスト」(人を誘惑する悪魔)って呼んでるんですよ。

オーケストラのような本格的な作曲に手を染めたのは、三、四年になってからです。きっかけはストラビンスキーの「春の祭典」です。レコードで聴いてもう驚いてしまって…。こういうのが音楽というなら、アイヌのタプカーラやリムセも全部似たようなものですから、それなら自分でも書いてみようか、書けるんではという気になってきたんです。

ストラビンスキーというのはロシア人ですが、僕はおそらくモンゴルの血が入っているんじゃないかと思うんです。私たちがモンゴルなわけですから、そこで共感が生まれたのではと思ったりしてるんですがね。バッハとかモーツァルトとかヨーロッパのものは立派には思いましたが、それ以上には感じませんでした。

昭和 60 年 3 月 30 日(土)夕刊  
土曜ぷらざ